日本学術会議主催学術フォーラム
「持続可能な社会を創り担うための教育と学習のチャレンジ」
2022年6月5日（日）13:00～17:00
日本学術会議講堂

ESDをめぐるこれまでの進展と今後の展望

持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）
理事　鈴木克徳
事務局長　横田美保

本日の発表

- オーバービュー：ESDをめぐるこれまでの進展と今後の展望
  - ESDをめぐる国際枠組みの変遷
  - 国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）の我が国における主要な成果
  - グローバル・アクション・プログラムの推進期間の成果
  - ESD for 2030の実現に向けた更なる取組への期待

- 実践事例：国内NGOによるウガンダの女子生徒への支援事業と高校での探究的な学びへの繋がり

ESDをめぐる国際枠組みの変遷

国連環境開発サミットに基づく時代（1992～2004）

アジェンダ21第36章	無

↓

国連ESDの10年（2005～2014）

国際実施計画（IIS）	国内実施計画

↓

グローバル・アクション・プログラム期間（2015～2019）

グローバル・アクション・プログラム	国内実施計画

↓

ESD for 2030の期間（2020～2030）

ESD for 2030	新国内実施計画

共通認識：私たちが暮らしている社会は持続可能でない。
私たちは自らの価値観やライフスタイルを変えなければいけない。

国連ESDの10年における我が国の主要な成果

世界に先がけて日本独自のアプローチを展開

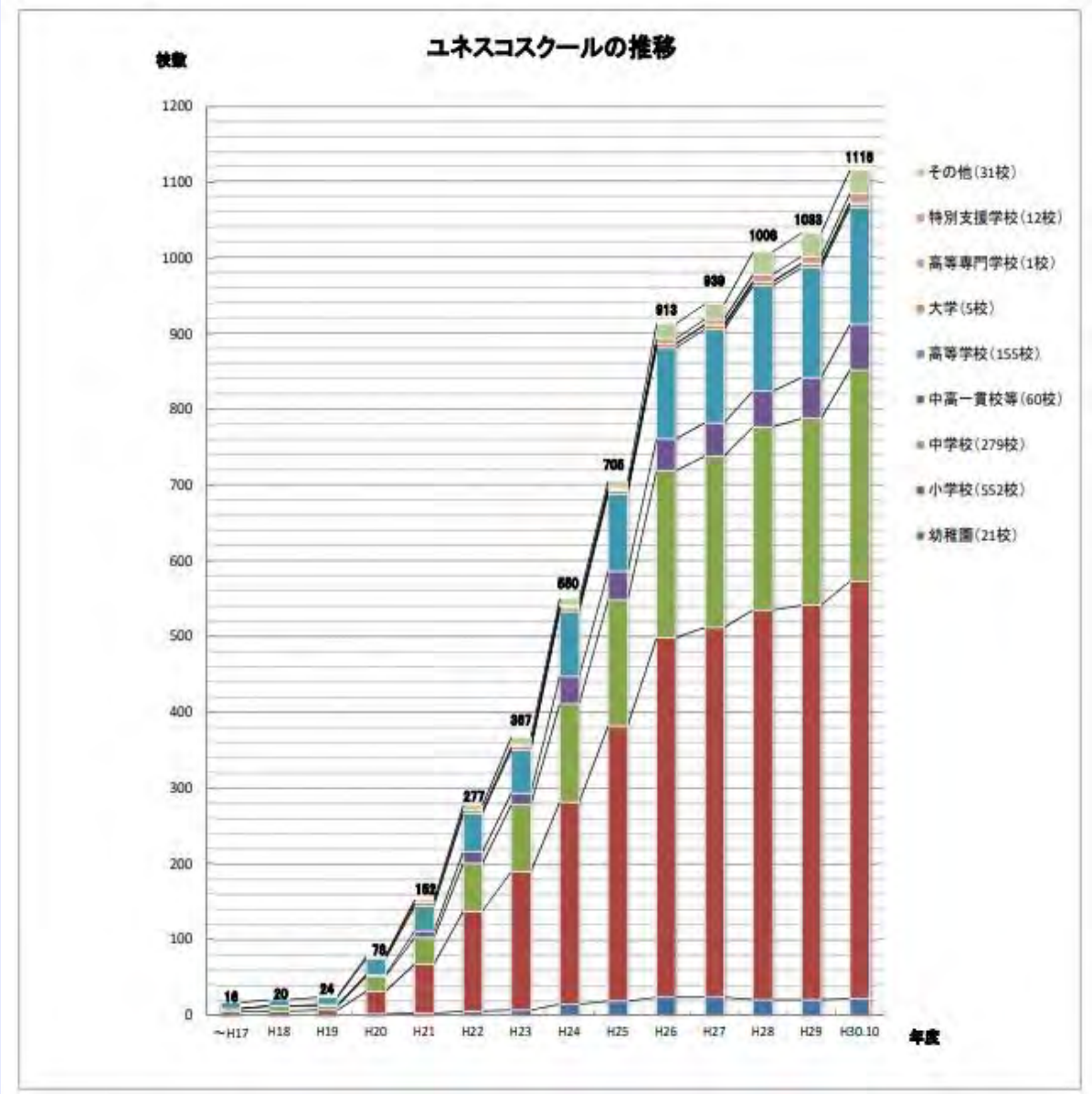
- マルチステークホルダー・アプローチ
  ESD関係省庁連絡会議、ESD円卓会議の設置
- ユネスコスクールを通じた学校へのESD浸透
- 大学によるユネスコスクール支援
  ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）
- 国連大学を通じたESD地域拠点（RCE）の推進
- ESDの10年を支える市民社会の動き

国連ESDの10年推進会議（ESD-J）設立等

ユネスコスクールの推進

文部科学省は、2008年以降、ESD推進拠点としてユネスコスクールを推進。

- ユネスコアジア文化センター(ACCU)、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUniVNet）等の支援を得て急速にユネスコスクール数は増大。
- 2019年現在全国で1,120校

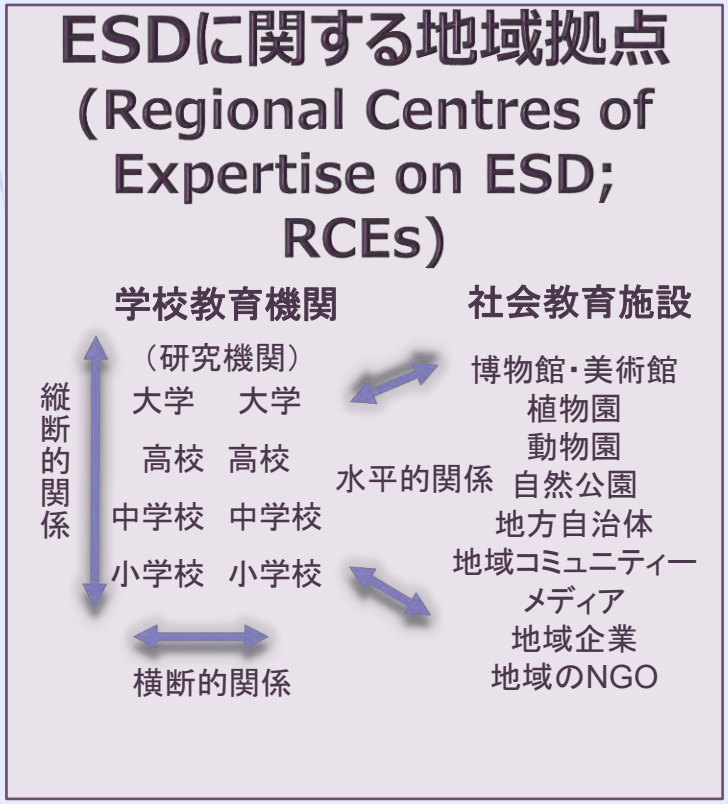


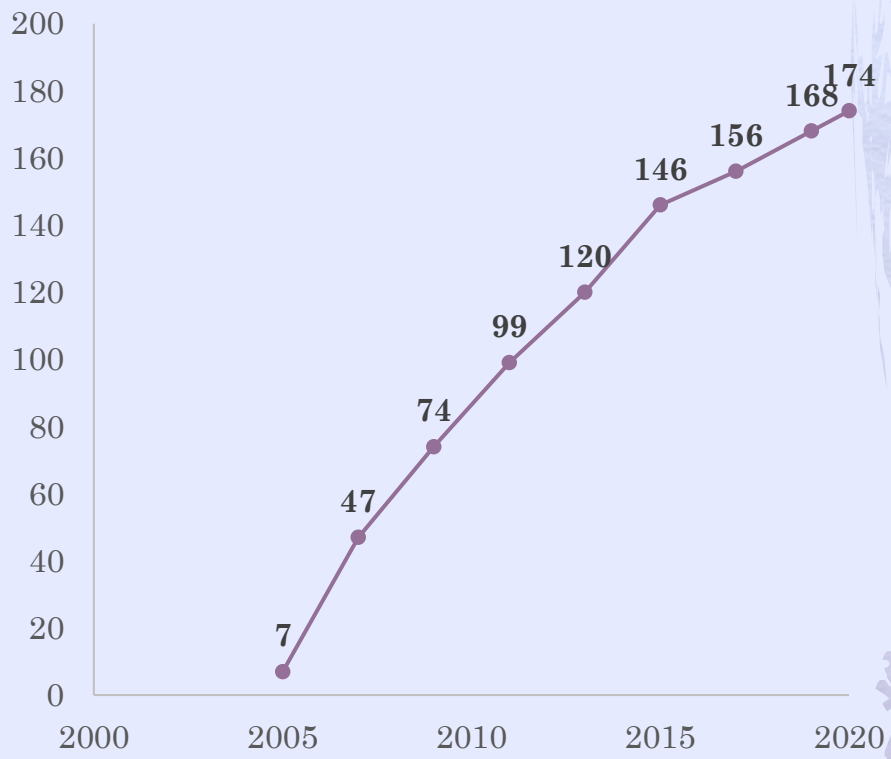
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）

2008年に設立。2022年5月現在全国で24大学。
ユネスコスクール活動を支援するユニークなシステム。

ESDに関する地域拠点(RCEs)

国連大学が推進する地域のESD推進枠組。





RCE数の推移

2021年1月現在の世界のRCE数は179

REGIONAL CENTRE OF EXPERTISE ON EDUCATION FOR SUSTAINABLE DEVELOPMENT

ACKNOWLEDGED BY

UNITED NATIONS UNIVERSITY

グローバルアクションプログラム（GAP）時代の成果

- 学習指導要領の改訂
  SDGs、ESD推進を明記
- ESD推進ネットワークの設立
  ESDの全国的な展開の仕組み
- 地域におけるESD・SDGsコンソーシアムの推進（2014年度～）
  大学、教育委員会、NGOなどが代表団体となり、多様なESD/SDGs 関係団体と協力し地域一帯でのESDの普及等多様な取組を全国各地 で展開

ESD推進に向けた更なる取組への期待

- SDGs関係者とESD関係者の繋がりの強化
  - ESD関係者等によるSDGsへの理解の促進
    2030アジェンダが求めるものは、望ましい社会の設定とその実現に向けたバックキャスティング。17ゴールはそのための手段。
- マルチステークホルダーのネットワーク
  - 市民社会組織、企業との繋がりの強化を！
- コロナ禍で明らかになったこと
  - 社会の脆弱性の露呈
  - DXの著しい進展への対応の必要性
- 目標とする社会は既にBeyond 2030
  - 例：気候変動では2050年炭素中立が課題
- 個別課題へのより深い関わり
  - 気候変動教育、防災・減災教育、生物多様性教育　等

国内NGOによるウガンダの女子生徒への支援事業と高校での探究的な学びへの繋がり

特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議 (ESD-J)

横田 美保

「生理で学校に行けなくなる女子学生の教育環境改善事業」

ウガンダ　JICAの草の根協力支援型（2021年11月～2024年4月）

Global Bridge Network

ウガンダにおける月経をめぐる問題

- ✓ 貧困で**生理用品が買えず、授業を欠席**　⇒**欠席による学力低下**
- ✓ 経血が制服に漏れてしまい、**男子生徒に からかわれる**　⇒**中退**
- ✓ **教員の月経の知識や衛生・性教育の不足**　⇒**女子生徒への支援の欠如**
- ✓ 古着・古布などの**不衛生なもので代用**　⇒**感染症の危険性**

女性が貧困から抜け出せない、児童労働、性産業への従事、若年での強制的な結婚　など

根本的な原因

- 宗教・信仰
- 社会的慣習

生理用布ナプキン

生理で学校に行けなくなる女子学生の教育環境改善事業

課題解決のための取り組み

◆月経時の衛生管理トレーニング、性教育、ジェンダー平等啓発

◆生徒・教員への布ナプキン作成トレーニング

◆学校施設の整備・改善

◆ラジオトークショー、会合　⇒地域住民、保護者への啓発

◆教育省・保健省へのアドボカシー　⇒月経の衛生管理、性教育、ジェンダー平等の啓発を学校の基礎教育として導入してもらうことを目指す

事例報告：
日本の高校生による探究的な学びのテーマとして、女子生徒の月経に関する課題解決の取り組み
～名城大学附属高等学校の「課題探究」授業～

■高校生がこのテーマを選んだ理由（2021年度：国際クラスの2-３年生５名）

- 高校での講演で、ケニアの途上地域で月経が原因で学校に通えず、将来が制限されてしまっている女児の存在を知った。
- 日本は、ジェンダー指数が低いとはいえ、教育面ではジェンダー格差は小さい。
  →アフリカにおいて、生理が女子の教育を阻み、自由に将来を選択できない現状を改善するために支援したい。

■生理が原因で女子の教育が阻まれないようにするにはどうしたらよいか
→**「途上地域の女子のキャリア形成に向けた布ナプキンと月経教育の普及」**をテーマに探究学習を行う

～名城大学附属高等学校の「課題探究」授業～

生徒の実践活動の例

- インターネット調査
- NPO/NGO等、関係者へのインタビュー、アンケート調査
- フィールドワーク
- セミナー、イベントへの参加　等

- 布ナプキン作成活動に協力者を増やす（学校内、保護者、地域など）ための広報、啓発活動
- 布ナプキン作成に地域住民、保護者の協力を得る活動
- 地元の企業数社から端布の提供を受ける
- NPOを通じて、ケニアへの布ナプキンの提供、ケニアの女子へのアンケートの実施

布ナプキン

布ナプキン簡易作製キット

- 物の提供のみならず、月経教育についても検討を進める
- 現地女子生徒の自立を目指し、布ナプキンを提供するのみならず、自作するための布ナプキン簡易作成キットの試作も企業と実施

課題に直面

学内に掲示したポスター
（生徒に布や材料提供の協力を求める目的）

生理で止めるな

国際クラス3年　林優香里　牧弥佑　山田莉央

"生理が原因で学校に行けないことがある"という途上国の女子の現状を変えるきっかけ作りとして、『布ナプキンと月経教育の普及』に向けた活動をしています。将来、一緒に未来を育む社会を支える仲間となる同世代の私たちだからこそ伝えられる思いがあるはずです。

布・フェルト・スナップボタンの寄付
にご協力をお願いします。

回収BOX設置場所：3階3A10教室前・8階SSHの部屋前
回収期間　　：6月15日～7月20日

布・フェルトは25センチ四方以上のもので、
家にある残りものや綿素材の着れない服など。
スナップボタンの大きさは問いません。
実際に途上国に送る布ナプキンに使用します。

布ナプキン作製にご協力してくださる方も募集しています。

現在は、株式会社チーム・オーストリーをはじめとした企業、地域の方々、本校生徒の保護者の方々にご協力いただいていますが、さらにご協力いただける方を募集しています。
ご協力いただける場合は、下記のメールアドレスまでご連絡いただくか、お子様を通して3A10林・牧・山田もしくは江上先生、羽石先生までお知らせください。型紙や作り方を送付させていただきます。よろしくお願いいたします。
Mail：mkmyu.myan@gmail.com

なぜ布ナプキンと月経(性)教育を普及させるの？

ジェンダー平等を促す可能性があると考えられるから。

ウガンダの女子中学生90名の半数以上が初潮が来て初めて月経を知った

性行為をすることでナプキンを得ている。

女性は月に一回、血が出る病気になる

生理用ナプキンが経済的な理由で買えない

学校に交換場所がない

宗教や慣習により学校の優先度が低く児童婚もある

性行為の軽視・誤った知識
→望まない妊娠・差別に発展

学校に行かない・行けない
→退学する生徒たち

教育を受けた平均年数
男子：6.7年　女子：4.9年

男女で収入に差が生まれる

知識の取得・共感
♡メッセージカード

＋

自作・再利用可能
布ナプキン

私たちの目標

教育を受ける ＋ 将来を選択できる

SDGsとの関連

プロジェクト要旨のポスター

プロジェクト内容

～布ナプキンプロジェクト～

途上地域の女子に布ナプキンを普及する

調査

【ケニアでの調査】（現地NPOの協力のもと実施）

(1)対象：ケニアの女子生徒10名（13歳～17歳）
調査方法：アンケート調査
日時：2021年3月

(2)対象：ナイロビのスラム街で生活する女性33名（20～50歳）
現地NPOスタッフ6名
調査方法：聞き取り調査
日時：2020年2月

結果

(1)

生理用品

使い捨て紙ナプキンが高価（50ksh～80ksh≒約50～80円）

古布・ビニールで代用

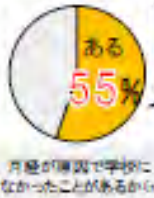
学校のトイレ

女子トイレのみ

隠蔽（グラウンドで拭く）

トイレに廃棄

(2)



月経が原因で学校に行けなかったことがあるか（n=33）

「月経用品を持っていなかった」
「親に月経期間は学校に行くなといわれた」等

月経用品は高いと思うか（n=32）

結論

月経により、学校に通えない女子がいることや、月経用品が高価だという問題を抱えていることがわかった。

仮説

調査結果から、経済的、環境・衛生問題に考慮すると、自作でき、繰り返し使用できる布ナプキンが有効であると考えた。

改善

＜現地のニーズに合わせて改善＞

白→黒

サイズ統一

作製した70枚をケニアに送付

活動①―イベント開催

【布ナプキン作製体験会】

対象：校内生徒1～3年生の有志18名（男12：女6）※コロナ対策として人数制限
日時：2021年5月13日15:40～17:00
内容：布ナプキンの作製・月経に関する知識クイズ・途上地域の現状について

【結果】

- 多くの参加者のジェンダー意識向上につながった
- 今後の活動に協力・参加したい・・・約94%

【課題】

- 時間内に布ナプキンを作り終えた人・・・11%
- 作る工程が難しかった

継続的に質の良い布ナプキンを作りたい

活動②―協力者を増やす（企業・NPO/NGO・地域住民・校内生徒）

企業3社	NPO/NGO	地域住民	校内生徒・部活
布の端切れの提供	9社 現地の調査／送付先協力	11名 布ナプキン作製の手伝い	1,946名 布ナプキン作製・材料回収の協力

布ナプキン簡易作製キット開発

TAKIKOU SEWING 有限会社タキコウ縫製

企業

不要な端切れを裁断

学校

キット化

キットだと、、、

- 布を重ねる位置に切れこみ
- 重ね縫いしやすい

短時間（約15分）で簡単に作れる！

結果

- 作製時間の減少
- 作業の簡易化

課題

- 経血が目立ちやすい
- サイズの確認
- 機能が劣しそう（漏れの心配）

結論・今後の展望

ジェンダー平等に向けた意識向上に関しては、イベント等を通じて、参加者の行動から、ある程度問題意識を醸成することに貢献できた。布ナプキンの普及に関しては一度ケニアに送付することができた。そして、布ナプキンの簡易作製キットは開発途中である。そのため、今後送付先として考えているタイやウガンダへの現地調査や試作品の完成を目指し、課題を踏まえ現在精案中である。この実現は、途上地域の女子の教育困難な状況の改善に貢献し、性別に関わらず誰もSDGsゴールへの意識を醸成することにつながると考える。

高校の実践活動の課題

- 情報の欠如：現地の衛生状況、月経に関する事情、布ナプキンの需要等
- コミュニケーション：現地NPOや裨益者との連絡が難しい
- ニーズ把握：実践活動が現地のニーズに即しているか
- インパクト測定：布ナプキンを配布した効果、女子生徒の反応

NPOの協力

- 実践活動への具体的なアドバイス
- 情報、専門知識の提供
- 現地とのネットワークを活かした支援先の紹介
- 現地NPOや女子学生とのコミュニケーションの補助（オンラインミーティングのアレンジ等）
- 継続的な成果のモニタリング、活動実施のサポート

意見交換
交流

ポジティブな影響

- **NPO、並びに現地の女子学生の交流による学び合い**
- **より現実的、効果的な支援活動ができる**
- **NPOとのコラボレーションで活動の幅が広がる**
- **活動の社会的な信頼度の向上、協力者の増加**

- **高校生の活動の活性化⇒日本で同問題に関心を持つ人が増える**
- **高校生が提供する布ナプキンや他の支援で現地に良いインパクトが生じる**
- **高校生の活動から、新たな活動の展開のヒントが得られる**

高校生の学びを発展させるためにNPO/NGO・日本のESD専門家に期待される役割

NPO/NGOが担えること

- 情報、専門知識の提供、実践活動への具体的なアドバイス
- 現地との交流のアレンジ、現地訪問のサポート
- 高校生の強みを活かした、クリエイティブな活動のサポート⇒**プロジェクトの試行の場の提供**
- 高校、大学を卒業してからも継続的に活動できる場の提供⇒インターンの受け入れ
- 社会的な信頼度の向上への寄与　等

学校・教育機関
ユース

つなぐ仕組み・人材

- ニーズのマッチング
- コンタクトポイント
- 架け橋の役割

＋

資金面の支援の必要性

NPO/NGO

- 情報・専門知識
- 実績
- 人材
- 活動の場

【補足資料】
～名城大学附属高等学校の「課題探究」授業～

「課題探究」

- 国際クラスの2- 3 年生
- 原則個人の研究活動
- ゼミに所属する

基礎的な探究のスキルや社会課題についての学習は１年生から実施

ゼミのテーマは以下 3 つ
①共生（ジェンダー・外国人住民など）
②観光（まちづくり・インバウンドなど）
③社会貢献（CSR・BOPなど）

①テーマ設定
②先行研究の検索・分析
③調査・分析
④論文作成
⑤ポスター発表・スライド発表
（日本語と英語）

ゴール（成果・実現したい像）からのバックキャスティング

課外活動、外部の活用

※育てたい生徒像

当事者意識をもって考え、動ける
突破力のある人間＝タフな生徒

提案型の論文が多いため、近年はそれを**プロジェクト化**し、その活動を踏まえて研究をブラッシュアップさせようと試みている。

名城大学附属高等学校

愛知県名古屋市にある名城大学の附属高校。平成18年から「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」の指定校に認定、さらに平成26年には「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」の指定校に認定（平成30年まで）。「国際クラス」はその後もSGHネットワーク参加校、WWR連携校として培った教育手法を活かし、確かな語学力とリアルな国際感覚を身につけた人材の育成に力を入れている。